高知女子大学看護学会誌　VOL.38, NO.2, pp12～21　2013

総　　説

ストレングスの概念分析
－がんサバイバーへの活用－

A Concept Analysis of Strengths
－Practical use of concept to the cancer survivors

岩本真紀（Maki Iwamoto）*　　藤田佐和（Sawa Fujita）**

要　　約

本研究の目的は、ストレングスの概念を明確にし、がんサバイバーへの看護実践や研究に有用な概念であるかを検討することである。22件の文献を対象とし、Walker＆Avantの概念分析の手法を参考に分析した。ストレングスの属性として、【方向性】【エネルギー】【結びつき】【強み】【拡張】の５つの属性が抽出された。先行要件には、【力の存在を信じること】【自分を知ること】が、帰結には、【エンパワーメント】【QOLの向上】【well-being】が抽出された。ストレングスは、個人の中に無限に存在し、個人の価値観を反映し、個人が前へと進もうとする動的な性質を有する概念であると考えられ、様々な苦難を抱えるがんサバイバーに対して、有用な概念であることが示唆された。

Abstract

The purpose of this study was to identify the concept of strengths and investigate whether this is useful in nursing practices and research for cancer survivors. In this study, 22 articles were included and analyzed employing the technique for concept analysis by Walker and Avant. Five strength attributes were extracted; directionality, energy, connection, asset, and expansion. Two prerequisites: “believing the presence of power” and “knowing my own” and three consequences: “empowerment”, “improvement in QOL”, and “well-being”, were extracted. The concept of strengths was considered to exist infinitely to an individual’s inside, reflect individual values, and have a dynamic property in which an individual tries to advance, and was suggested to be useful for cancer survivors suffering various difficulties.

キーワード：ストレングス、がんサバイバー、概念分析

Ⅰ．はじめに

ストレングス（strengths）あるいは、ストレングスの視点（strengths perspective）という用語が登場してきたのは、1980年代後半のアメリカである。これまでは、疾病や機能低下などの問題に焦点を当てた関わりが主流であった。しかし、単に問題を解決していくという思考ではなく、その人の生活全体を支援し、成長・発達させていく必要性から、ストレングスの考え方が生まれてきた。

ストレングスは、主に社会福祉領域で活用されており、Cowger[1]は、「エンパワーメントの燃料であり、エネルギー源である」と述べている。Miley[2]は、「ストレングスは、生来もっている能力や獲得した才能、発達させてきたスキルなど、私たちが得意であると思うもの」と定義している。また、Saleebey[3]によると、「ストレングスとは、能力や資源、強みなどのことで、苦難に取り組み、対処し、戦うことで、自分や他者、世界について学ぶことである」と定義されている。このように、ストレングスは理念としては強調されている[4]が、その定義は統一されないままに活用されている。看護領域では、Lundmanら[5]は、内面的な強さ（inner strength）として、堅固さ、創造力、結合、柔軟性の４つ

*香川県立保健医療大学　　**高知県立大学看護学部

の構成要素を明らかにしており、患者の内面的な強さに注目し、支援することの必要性を示唆している。現代医療は、専門職への依存ではなく自分で自分をコントロールする方向へと向かっており[6]、患者のストレングスに注目することは、治療中心から患者のエンパワーメントを目的とした実践に転換させることができる[7]。

がんサバイバーは、がんの症状だけではなく、集学的治療を受けることで副作用や後遺症をも自らの力でマネージメントしていかなければならず[8)~10)]、様々な試行錯誤を繰り返し、自分流の方法を編み出しながら、がんと共に生きる新たな生き方を見出している。また、がんと共に生きる上で、身体的、精神的、社会的、実存的な苦痛を抱えているが、それらを乗り越え、自分らしく、たくましく、豊かに自分の人生を送ることが望まれる。その過程で、看護師が、ストレングスの概念を活用することにより、がんサバイバー自身のもつ力を引き出し、支え、強化することができると考える。そこで本研究では、ストレングスの概念を明確にし、がんサバイバーへの看護実践や研究に有用な概念であるかを検討することを目的とし、概念分析を行う。

Ⅱ．研　究　方　法

１．データ収集方法

ストレングスの構成概念を導くために、国内の文献については、「医学中央雑誌（1983年～2011年）」「CiNii」を用いて、「強靭さ」「ストレングス」をキーワードに検索し、127件が抽出された。海外の文献については、「MEDLINE（1966年～2012年）」を用いて、「strengths」と「empowerment」「hope」「recovery」「nursing」「concept analysis」、及び「inner strength」で検索し、165件が抽出された。ストレングスを活用した事例報告が多かったため、ストレングスの定義や構成概念について記述されている15文献を分析対象とした。また、引用文献に使われていた書籍のうち、ストレングスの定義や構成概念について記述されている７件を含め、22件を分析対象とした。

２．分析方法

Walker＆Avantの概念分析の手法を参考にした。Walker＆Avant[11]は、概念の構造と機能を調べることが概念分析の目的であると述べ、①概念を選択する、②分析目的を決定する、③概念の用法を明らかにする、④概念を定義づける属性を明らかにする、⑤モデル例を明らかにする、⑥補足例を明らかにする、⑦先行要件と結果を明らかにする、⑧経験的支持対象を明らかにする、という分析手順である。本研究では、ストレングスの概念を選択し、がんサバイバーへの看護実践や研究に有用であるか検討することを分析目的とした。分析対象の各文献について、ストレングスの定義や構成要素などのストレングスに関する記述を抽出した。抽出した内容について類似性、相違性を検討しながらサブカテゴリーを生成した。さらに抽象化してカテゴリーを生成し、ストレングスの概念を定義づける属性とした。次に、ストレングスの属性を検証するために、関連概念との類似点と相違点を検討し、ストレングスの概念を定義した。ストレングスの先行要件と帰結については、各文献から内容を抽出し、属性との関係を検討しながら、カテゴリーを生成した。本研究では、モデル例、経験的支持対象を明らかにする手順は省略した。

Ⅲ．結　　果

ストレングスの属性と先行要件、帰結を述べ、その後にストレングスと関連概念の類似点及び相違点を検討し、最後にストレングスの定義を述べる。

１．属　性

ストレングスの属性として、【方向性】【エネルギー】【結びつき】【強み】【拡張】の５つの属性が抽出された。その裏付けとなる文献は、表１に示したとおりである。カテゴリー名は【　】で表し、サブカテゴリーは＜　＞で表している。

１）【方向性】

【方向性】とは、進むべき方向をもっている状態を表す。進むべき方向は、自分自身で選択

表１　ストレングスの属性

	著　　者	方向性			エネルギー			結びつき			強　　み				拡　　張		
		願望	目標	好み	勇気	見通し	自信	相互性	親密性	信頼	能力	気質	知識や知恵	資源	意味の生成	創造性	発展性
1	Lewis, K. L., Roux G.(2011)				○		○	○	○	○	○		○				○
2	Lundman B. et al. (2011)					○		○	○	○						○	
3	Lundman B. et al. (2010)				○		○	○	○	○	○		○		○	○	○
4	佐久川政吉，他 (2010)	○			○		○	○			○		○		○		
5	Holly N. B. et al. (2009)							○						○			○
6	SaleebeyD.(2009a)				○	○	○	○	○	○	○					○	○
7	SaleebeyD.(2009b)						○				○	○	○	○		○	
8	白澤　政和（2009）	○	○	○							○			○			
9	WalterE.K.(2009)							○			○		○	○			
10	山口　真里（2009）	○	○	○			○		○		○	○	○	○	○		
11	森田　智裕（2006）			○							○	○	○	○	○	○	○
12	Rapp C. A., Goscha R. J.(2006)	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			○
13	白澤　政和（2005）	○		○							○			○	○		
14	山口　真里（2004）	○	○				○		○		○		○				
15	Roux G. et al. (2003)				○			○	○	○			○				○
16	Rutherford M. S., Parker K. (2003)				○		○									○	
17	Koob P. B. et al. (2002)							○	○	○			○				○
18	狭間香代子（2001）		○					○	○	○	○			○	○	○	○
19	Becky F., Rosemary C. (2000)	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			○
20	Miley.K.K, et al. (1998)										○	○					
21	Cowger C. D.(1994)	○			○		○	○		○	○			○			○
22	Weick,A., Rapp C. A. (1989)	○	○							○	○						○

し、決定する。人は自分の願望や目標、好みを認識し、自分にとって意味や価値のある方向を選択し、決定している。【方向性】は、＜願望＞＜目標＞＜好み＞から構成されている。＜願望＞は９文献でみられ、人が何を望んでいるか、欲しいものは何か、生活をどのようにしたいと望んでいるかなどの個人の望みや夢、ニーズを表している。人は、自分の願望を叶えようとする方向へと進もうとする。＜目標＞は７文献でみられ、人が達成したいと考えるゴールを表している。自分が設定した目標は、その達成の方向に向かって個人を動かす。人間は目的をもって生きる有機体であり、目標はものごとを達成するために必要なものである。未来を標的とした行動を促し、達成される課題の困難性に見合った努力を導く。この目標は、自分自身で決定するものであり、他人が失敗しないようにと考えて、目標達成の可能性から限界を決めてはならない。＜好み＞は６文献でみられ、個人の趣味や娯楽など、生活していく中での楽しみのことである。楽しみは、その方向に向かう意欲や動機を高めることにつながる。夢や目標などがすぐに見つからなくても、楽しみは容易に見出すことができ、現在だけではなく過去のものも含まれる。

２）【エネルギー】

【エネルギー】とは、人を意味ある方向へと動かすパワーの源のことを表す。人は自分を信じ、あきらめない勇気をもち、明るい見通しがたつことによって、前に進んでいる。【エネルギー】は、＜勇気＞＜見通し＞＜自信＞から構成されている。＜勇気＞は７文献でみられ、意味ある人生を見つけるために努力し続けることである。ストレスフルな状況にあっても、その状況に対処し、あきらめないことである。＜見通し＞は２文献でみられ、自分の未来を予測できることである。苦悩の中にあっても、見通しがもてることにより、前へ進むことができる。人は様々な経験から、自分や世界の見通しを立てている。＜自信＞は11文献でみられ、自分自身や自分の可能性を信じることである。障害を乗り越えたり、不幸や苦難を乗り越えた人々がもっている。自信は、人を動かし、変化を恐れない。自信がないために、やりたいことができないということはよくあることである。新しいことに挑戦する時は、しばしばリスクを伴うものであり、自信がもてないことにより、チャンスをつかもうとする気持ちを思い留めることもある。

３）【結びつき】

【結びつき】とは、周囲と関わり合い、つながりがある状態を表す。人は、他の人々や社会との親交を経験し、調和や平穏の感覚を得て、社会についての意識を高めている。【結びつき】は、＜相互性＞＜親密性＞＜信頼＞から構成されている。＜相互性＞は13文献でみられ、双方

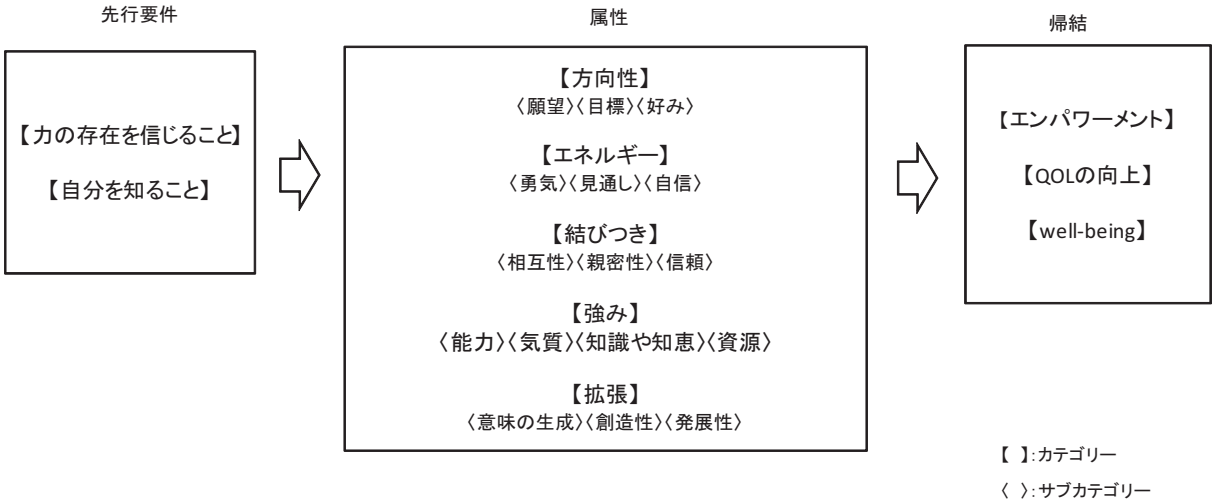

図１　ストレングスの先行要件、属性、帰結の関連

の関係が一方的なものではなく、互いに学び合い、ともに楽しんで過ごすことを表している。相互に尊敬しあい、自分のことに責任を持ったり、他人に対する責任を負ったりすることでもある。この関係は、与えられることだけではなく、社会に対して貢献することも含んでいる。＜親密性＞は11文献でみられ、その関係は、温かさ、受容、気遣い、尊敬、そして楽しさという特徴を持ち、双方を高めるものである。家族や友人から遠ざけられると、孤独や孤立を感じることになる。親しい人との交流により、励ましが得られたり、支えられたりする。また、安定性や快適さを感じる。＜信頼＞は11文献でみられ、誠実を意味する。うそや真実の隠蔽はない。また、約束が守られることでもある。不信には、傷つくことを想像させるような恐怖や、搾取、拒絶、批判、懲罰、他人による支配が根底にある。また、個人の語りを正確ではないと客観的な事実から判断されるのではなく、現実は多様で、その個人にとっての事実であるとみなされる。

4）【強み】

【強み】とは、個人の優れているところや得意であるものを表す。人が、本来もっている気質や能力、獲得した知識や知恵、活用できる資源などが含まれ、無限に存在するものである。【強み】は、＜能力＞＜気質＞＜知識や知恵＞＜資源＞から構成される。＜能力＞は17文献でみられ、物事を成し遂げる力のことである。すべての人は広範囲にわたる能力や才能を備えている。この能力は潜在的なものも含んでいる。人は利用されていない未知の能力を多く持ち、生涯のすべての間あるいはほとんどにおいて、この能力を完全に明らかにすることは難しい。能力は家族、知人、専門家、また自分自身でさえも、正当に認識されているとはいえない。この能力は、獲得し、発達させることもでき、いろいろな困難を乗り越え、生き抜いてきた体験により身につけることもある。成功体験からだけではなく、失敗から得られることもある。＜気質＞は６文献でみられ、人が本来持っている気性、性質のことである。人の気質は、いかに自分が自分自身を認識していようが、あるいは他人が自分をいかに認識していようが、自分が誰かを明らかにするという特徴がある。人の気質について考えることは容易なことであるが、気質が役に立つためには、自分が心の中で望んでいることを他人から認められることである。つまり、その人にとって、自分自身が誰かという感覚を取り戻すことである。＜知識や知恵＞は12文献でみられ、物事を正しく認識し、判断していく力のことである。これまでの経験の中で培ってきた知識や知恵は個人のもつ力として役立つものである。そのため、高齢者などは、身体機能は衰弱しやすい反面、人生経験が豊かであり、知識や知恵が蓄えられているなどの成熟現象がみられ、強みが豊富といえる。＜資源＞は11文献でみられ、人がよりよい生活をし、成長し、成熟するために役立ち、手助けとなるものである。人は自分の必要とする資源に対する権利を有している。この資源には、家族や近隣に限らず、地域の団体、ネットワーク、公共機関やボランティアなども含まれている。フォーマルなサービス提供機関も重要であるが、自然発生的な支援は多岐にわたり、多数存在しており、より重要度が高い。コミュニティの中には、学習や交流の機会も多く存在している。

5）【拡張】

【拡張】とは、未来へ向けての成長や可能性を表す。変化しながら発展していくという動的な性質を有している。人は、様々な苦難にあっても、変化を恐れず、新たな意味づけをし、学び、成長している。【拡張】は、＜意味の生成＞＜創造性＞＜発展性＞から構成されている。＜意味の生成＞は６文献でみられ、自分自身がどういう見方をするか、どういう意味を与えるかということを表している。意味の生成は、個人が自らの世界を意味づける基盤となり、主観的なもので、第三者的に「～である」とみなすことはできない。人は、意味を転換することで、変化を生み出し、未来への可能性を拡げることができる。＜創造性＞は７文献でみられ、変化を恐れず、新しく創り出そうと奮闘することを表している。創造性は、変化を避けるというよりも、変化は成長のための可能性を提供するという信念と結び付いており、様々な苦難に対し

ても、克服できる経験や挑戦として受け入れる心の広さのことを表している。＜発展性＞は12文献でみられ、学び、成長し、変化し続けることであり、固定的ではなく動的な性質を有する。侮蔑、障害、病気、混乱、圧迫、そして自分の失敗にでさえ、取り組み、対処し、闘うことで、人は自分や他人や世界について学んでいる。

２．先行要件

ストレングスの先行要件を記述した文献は少なく、佐久川ら[12]は、ストレングスには先行要件がないと記述していた。先行要件は、６つの文献から【力の存在を信じること】[5)13)～17)]、１つの文献から【自分を知ること】[18)]の２つが抽出された。

１）【力の存在を信じること】

【力の存在を信じること】は、すべての人が多くの潜在的な力をもっており、どんなに無力のように見えたとしても、誰にでも開発されるための力があるということを表す。どんなに困難な状況にあったとしても、悲嘆に打ちひしがれ希望が見えない状況にあったとしても、本来持っている力は失われてはいない。しかし、人間のもつ力を否定し、力があると認識できなければ、あるいは力があることを信じることができなければ、ストレングスを活用することはできない。

２）【自分を知ること】

【自分を知ること】は、自分が何に価値をおいているかを知覚することができ、自分のことを認識していることを表す。ストレングスは、主観的なものであり、個人の価値に基づくものである。自分がどうなりたいのか、どのような力や資源を持っているのか等、自分自身を知らなければ、ストレングスを活用することはできない。

３．帰　結

ストレングスの帰結には、５つの文献から、【エンパワーメント】[1)7)16)18)19)]、４つの文献から【QOLの向上】[7)16)19)20)]、４つの文献から【well-being】[16)21)22)23)]の３つが抽出された。

１）【エンパワーメント】

エンパワーメントとは、社会的に力が弱い人の立場に立って個々の潜在能力を引き出すことであるが、その引き出す対象がストレングスである。ストレングスは、エンパワーメントを実現する上での条件であり、土台とみなされる。ストレングスは、問題解決という思考ではなく、その人の生活全体を支援し、成長させていく必要性から生まれた概念であり、個人の価値を尊重しようとするものである。エンパワーメントを促進するためには、ストレングスの視点が必要であり、エンパワーメントの土台となるものである。

２）【QOLの向上】

ストレングスは、人間の生活の場に影響を及ぼし、生活の質を向上させる。個人のもつ強みを活かし、意味ある方向へと向かうことにより、個人のQOLは向上する。Rappら[24)]の研究において、ストレングスを活用したケースマネジメントを受けたクライエントが生活領域における目標を他の誰よりも達成していたと報告している。

３）【well-being】

ストレングスは、親密な結びつきを有する概念であり、より安定した精神を持つことを促す。Maciasら[25)]の研究では、ストレングスを活用したケースマネジメントを受けたクライエントは、身体および精神の全体的な健康が有意に保たれていたと報告している。また、気分、思考の障害が少なく、精神的に安定していたと報告している。

４．ストレングスの関連概念

１）リカバリー

Patricia[26)]は、リカバリーについて、一つの過程、生活の仕方、姿勢、日々の課題への取り組み方であると定義している。また、野中[27)]によれば、「病気や障害のために失ったものを回復する過程であり、具体的には、社会的役割、自尊心、その人の人生などである」としている。リカバリーは、一旦喪失したことからの回復過程を意味している。リカバリーが喪失というネガティブな面からの回復を意味するのに対し、

ストレングスは、強みやエネルギーなどの人間のよりポジティブな面を捉えようとしている。

2）レジリエンス

Walsh[28]は、レジリエンスを「過酷な人生の困難に耐えたり、そこから立ち直ったりする能力」と定義している。Rutter[29]の定義は、「深刻な危険性にもかかわらず、適応的な機能を維持しようとする現象から、深刻な状況に対する個人の抵抗力」としている。レジリエンスは、これまで乗り越えてきた困難への対応を精神的な強さや力として認識し、支援に活かそうとするものである。この困難を乗り越えてきた精神的な強さや力を支援に活かそうとする点は、ストレングスと類似する。しかし、レジリエンスが主に人生の危機や困難の経験など、深刻な状況の経験を前提として、その深刻な状況を乗り越える個人の力を表しているのに対し、ストレングスは危機や困難などの前提はなく、人間が本来潜在的にもっているものと考えられている。

5．ストレングスの定義

本研究の結果より、ストレングスを以下のように定義した。ストレングスは、力の存在を信じ、自分を知ることで、活用できるものである。ストレングスとは、【方向性】が明確で、その方向に進むための【エネルギー】が充実した状態である。また、周囲との積極的な【結びつき】を有し、【強み】を活かして、【拡張】していく強さのことである。ストレングスが活用されることで、エンパワーメントが促進され、QOLやwell-beingの向上が期待できる。

Ⅳ．考　　察

1．ストレングス概念の特徴

ストレングスは、個人の価値観を反映した概念である。人がどのような願望を抱いているのか、どのような目標をもっているか、またどのような楽しみを有しているかは、人の望む生き方や生活の方向性を決定する。これは、他人がその人に合わせて決めたり、設定するものではなく、自分が自分の価値観に基づいて決めるものである。つまり、ストレングスは、個人の価値観を反映した概念であり、ストレングスを活用した看護援助は、患者の価値観を尊重し、患者の自律性を育成することにもつながると考える。Beckyら[20]は、ストレングスモデルの原理として、問題よりも利用者の強みを発見し、引き出すことで自律を支援すると述べている。患者の抱える病気や障害、問題よりもその人がもつ強み、つまり、能力や資源などに目を向けることで、自律支援につなげるような看護援助が期待できる。

また、ストレングスは個人の中に無限に存在するものである。強みである能力は、現在、目に見えるものだけではなく、まだ発見されていない潜在的なものも含まれている。成功や失敗を問わず、様々な体験から獲得される。人は誕生してから、様々な体験をして生活していることから、無限のストレングスを有しているといえる。困難に打ちひしがれ、力をなくし、様々な支援を受けて生活している状態でも、その支援はその人がもつストレングスである。人は皆、他人や自然、社会との関わりを有しており、その関わりの中にもストレングスが存在している。自分の中に無限に存在しているストレングスに自らが気づくことで、苦難を乗り越えることができると考える。また、苦難を乗り越えた体験からストレングスが獲得され、そのストレングスが活用されることで、さらに自分らしく豊かな生活を促進できると考える。ストレングスは無限に存在し、どのような人にでも、どういう状態であったとしても活用できる概念であり、看護師は患者が自らのストレングスに気づけるように関わり、活用できるように支援することが重要と考える。

さらに、ストレングスは、人が変化を恐れず前へ進もうとする動的な性質を有する概念である。人は様々な苦難にあっても、意味を転換することで、変化を生み出し、未来への可能性を拡げることができる。ストレングスの概念は、変化を避けるというよりも、変化は成長のための可能性を提供するという信念と結び付けられており、新たな意味づけをし、学び、成長している状態である。ストレングスを活用することで、患者の可能性を拡げ、前に進むエネルギーを充実させることができると考えられる。

看護領域において、患者自身が自らの生活や生き方を決定し、自らの健康を維持、増進していくための支援は大変重要であり、患者のもつ力を引き出し、支えていくことが求められている。ストレングスの概念は、個人のもつ強さに焦点を当て、個人の価値を尊重し、エンパワーメントを促進していこうとするもので、患者の力を引き出し、支えていくための看護援助に有用な概念であると考えられる。

２．がんサバイバーへの活用

がんサバイバーは、集学的治療を受けており、化学療法による治療は長期にわたるため、仕事の変更を余儀なくされるなど、これまでの社会生活を継続できなくなることもある[30]。外科療法による乳房の喪失[31][32]、排便障害の出現[33]などは、喪失感やボディイメージの変容を伴うものである。このような体験は、がんサバイバーの自己概念を揺さぶり、自己価値を低下させる危険性もある[34]。また、治療がいったん終了し、新たな生活を歩み始めても、常に再発や転移に対する心配があり、将来に対する不安を感じやすい[35][36]。また、治療困難になった場合、70～80％にがん性疼痛が出現するともいわれており、がんサバイバーのもつ不安、恐怖、抑うつ、スピリチュアルな苦痛は、全人的苦痛として捉えられている[37]。このように、がんサバイバーは、がんと診断された時から、身体的、精神的、社会的、実存的な苦痛を抱えて生活しており、その生活は苦難に満ちている。しかし、次々にもたらされる苦難に、がんサバイバーはエネルギーを消耗しており、自分の力を活かすことが難しい状況にもある[38]。ストレングスは、個人の中に無限に存在しており、自分を知り、力の存在を信じることができれば、誰にでもどのような苦難にあろうとも活用することが期待できる。ストレングスの属性には、【強み】や【結びつき】があり、がんと診断され、大きな衝撃を受けている時でも、その人がもつ能力や資源に目を向け、孤独を感じないような看護援助をすることで、その人のもつストレングスを活用できると考える。また、ストレングスの属性である【拡張】は、変化を恐れず、新たな意味づけをし、学び、成長することを意味しており、がんとともに生きる新しい生活や生き方を見出していくがんサバイバーに有用であると考えられる。ストレングスのもつ【方向性】は、がんサバイバーの進む方向性を明確にし、新たな自分らしい生活や生き方を見出していくために活用できると考える。

手術を受けたがんサバイバーが、がんと共に生きる新しい生き方に意味を見いだすためには、自分が何に価値をおいているのか、何を望んでいるのかを考えることが重要である。看護者は、がんサバイバーが今後の方向性を明確にしていくことを支援するために、がんサバイバーの価値観を尊重しながら、見通しが立つような情報を提供することが有用と考える。がんサバイバーがどのような関わりの中で生活しているのかを把握しながら、周りの支援が得られるように援助することも重要である。また、手術により形態・機能を喪失し、身体的、精神的、社会的な問題に日々試行錯誤しながら取り組み、努力しているがんサバイバーに対しては、これまでの体験を通して、どのような強みをもっているのかを共に考えることで、気づいていないストレングスを活用できると考える。

また、ストレングスの概念を研究に活用することは、がんサバイバーのもつ問題に焦点をあてた研究だけではなく、がんサバイバーのポジティブな側面を明らかにすることが期待できる。がんサバイバーのストレングスを明らかにすることで、がんサバイバーの自律性を育成し、がんサバイバーがもつ力を引き出し、支え、強化していくための看護援助が導き出されると考える。

Ⅴ．結　　論

ストレングスの概念を分析した結果、５の属性、２つの先行要件、３つの帰結が抽出された。ストレングスは、力の存在を信じ、自分を知ることで、活用できるものである。ストレングスとは、【方向性】が明確で、その方向に進むための【エネルギー】が充実した状態である。また、周囲との積極的な【結びつき】を有し、【強み】を活かして、【拡張】していく強さのことである。ストレングスが活用されることで、エンパワーメントが促進され、QOLやwell-beingの向上が期待できる。ストレングスは、個人の中に無限に存在し、個人の価値観を反映し、個

人が変化を恐れず、前へと進もうとする概念であると考える。様々な苦難を抱えるがんサバイバーに対して、ストレングスは活用しやすく、がんと共に生きる新しい生き方を意味づけ、前へ向かうことを促進するためのケアにつながると考える。また、手術を受けたがんサバイバーが自らの生活を再構築していく過程で、ストレングスが活用されることで、自らの強みを活かしエンパワーメントが促進されると考えられ、ストレングスはがんサバイバーに活用できる概念と考える。

＜引用・参考文献＞

1）Cowger C.D.：Assessing Client Strengths: Clinical Assessment for Client Empowerment, Social Work, 39(3), 262-268, 1994.

2）Miley K.K., O'Melia M., DuBois B.L.：General Ist Social Work:An Empowering Approach, Allyn and Bacon, 205, 1998.

3）Saleebey D.：The Strengths Approach to Practice、Saleebey D., The Strength Perspective in Social Work Practice (Fifth Edition), Allyn & Bacon、Boston, 93-107, 2009b.

4）小松源助：ソーシャルワーク実践におけるストレングス視点の特質とその展開、ソーシャルワーク研究、22(1)、46-55、1996.

5）Lundman B., Viglund K., Alsén L., Jonsén E., Norberg A., Fischer R.S., Strandberg G., Nygren B.：Development and psychometric properties of the Inner Strength Scale, International Journal of Nursing Studies, 48(10), 1266-1274, 2011.

6）秋元典子：手術を経験する子宮がん患者の看護実践領域における研究の概観と今後の課題、岡山大学医学部保健学科紀要、14、113-120、2004.

7）狭間香代子：社会福祉の援助観 ストレングス視点・社会構成主義・エンパワメント、筒井書房、東京、136、2001.

8）齋藤智子、佐藤冨美子：外来で化学療法を受けるがん患者のセルフケア行動と自己効力感の関連、日本がん看護学会誌、24(1)、23-34、2010.

9）仲村周子、神里みどり：リンパ浮腫を伴った乳がん患者の日常生活困難感とその対処法および自己との折り合い、沖縄県立看護大学紀要、11、1-13、2010.

10）秋元典子、佐藤禮子：子宮がん患者が広汎子宮全摘出術後を安寧に生きるための強靭さの獲得を促進する看護援助、千葉看護学会会誌、9(1)、26-33、2003.

11）Walker L.O., Avant K.C.：Strategies for Therapy Construction in Nursing, 4th edition、中木高夫、川﨑修一訳 、看護における理論構築の方法、医学書院、1-308、2005/2008.

12）佐久川政吉、大湾明美、宮城重二 ：高齢者におけるストレングスの概念、沖縄県立看護大学紀要、11、65-69、2010.

13）Lundman B., Alex L., Jonsén E., Norberg A., Nygren B., Fischer R.S., Strandberg G.：Inner strength--a theoretical analysis of salutogenic concepts, International Journal of Nursing Studies, 47(2), 251-260, 2010.

14）Walter E.K.：The Opportunities and Challenges of Strengths-Based,Person-Centered Practice：Purpose, Principles, and Applications in a Climate of Systems Integration, Saleebey D., The Strength Perspective in Social Work Practice (Fifth Edition), Allyn & Bacon, Boston, 47-71, 1996, 2009.

15）山口真理 ：ソーシャルワークにおけるストレングスの特性－類似概念との比較をつうじて－、広島国際大学医療福祉学科紀要、５、65-78、2009.

16）Rapp. C. A., Goscha R. J.：The Strengths Model Case Management with Psychiatric Disabilities Second Edition, 田中秀樹訳(2008)、ストレングスモデル 精神障害者のためのケースマネジメント（第２版)、金剛出版、東京，59-102、2006.

17）森田智裕：ストレングス－利用者のもつ本当の強さとは何か、月刊総合ケア、16(8)、55-57、2006.

18）山口真理：ストレングスに着目した支援過程研究の意味、福祉社会研究、4・５、97-114、2004.

19）白澤政和 ：ストレングスモデルのケアマネジメント－いかに本人の意欲・能力・抱負を高めていくか－、ミネルヴァ書房、京都、2-24、2009.

20) Becky F.,Rosemary C., Strengths-Based Care Management for Older Adults, 青木信雄、浅野仁訳、高齢者・ストレングスモデルケアマネジメント ケアマネジャーのための研修マニュアル、筒井書房、東京、19-40、2000/2005.
21) Lewis K.L.,Roux G.：Psychometric testing of the Inner Strength Questionnaire: women living with chronic health conditions, Applied Nursing Research, 24(3), 153-160, 2011.
22) Rutherford M.S., Parker K.：Inner strength in Salvadoran women：a secondary analysis、Journal of Cultural Diversity, 10(1), 6-10, 2003.
23) Weick A., Rapp C.：A strengths perspective for social work practice.,Social work, 34(4), 350-354, 1989.
24) Rapp C.A., Wintersteen R.：The strengths model of case management：Results from twelve demonstrations, Psychosocial Rehabilitation Journal, 13(1), 23-32, 1989.
25) Macias C., Kinney R., Farley O., Jackson R., Vos B.：The role of case management within a community support system, Community Mental Health Journal, 30(4), 323－339, 1994.
26) Patrica D.：Recovery：the lived experience of rehabilitation, Psychosocial Rehabilitation Journal, 11(4), 12-15, 1998.
27) 野中猛：リガバリー概念の意義、精神医学、47(9)、952-961、2005.
28) Walsh F：The concept of family resilience、family Process, 35(3), 261－281, 1996.
29) Rutter M.：Resilience in the face of adversity, British Journal of Psychiatry, 147, 598-611, 1985.
30) 河越栄、松本智子：卵巣がん患者の化学療法治療過程における体験、公立豊岡病院紀要、18、43-47、2007.
31) 阿部恭子、黒田久美子、馬場由美子：乳房切除術を受けた乳がん患者のニードに応じる乳房補整のケア、千葉大学看護学部紀要、32、23－29 、2010.
32) 温井由美：乳房温存術を受ける患者の術前・術後のストレス・コーピング、がん看護、7(1)、79－85、2002.
33) 藤田あけみ、佐藤和佳子、岡美智代、佐川美枝子：直腸癌低位前方切除術患者の術後経過期間別の排便障害と自尊感情との関係について、日本看護科学会誌、22(2)、34-43、2002.
34) 黒澤やよい、田邊美佐子、神田清子：広汎子宮全摘出術を受けた女性が抱く性生活への戸惑いとその対処、群馬保健学紀要、30、59-66、2009.
35) 山脇京子、藤田倫子：胃がん手術体験者の職場復帰に伴うストレスとコーピング、日本がん看護学会誌、20(1)、11-18、2006.
36) 蛭子真澄：胃がん術後患者の治療後回復期早期の心理状態、日本がん看護学会誌、15(2)、41-51、2001.
37) 月山淑：がん患者の全人的苦痛における身体的苦痛除去の重要性、ストレス科学、22(2)、104、 2007.
38) 氏家幸子監修 成人看護学E. がん患者の看護、廣川書店、東京、13、1998.
39) Holly Nelson-Becker et al.：The Strengths Model with Older Adults., Saleebey. D：The Strength Perspective in Social Work Practice Fifth Edition, Allyn & Bacon, 161-180, 2009.
40) Koob PB; Roux G; Bush HA ：Inner strength in women dwelling in the world of multiple sclerosis, International Journal for Human Caring, 6(2): 20-28, 2002.
41) Roux G, et al.：Development and testing of the Inner Strength Questionnaire.; Journal of Cultural Diversity, Spring; 10(1)：4-5, 2003.
42) Saleebey D.：Introduction:Power in the People, Saleebey D., The Strength Perspective in Social Work Practice (Fifth Edition), Allyn & Bacon, Boston, 1-23, 2009a.
44) 白澤政和：ストレングスに着目したケアプランの手引き－星座理論を使って－、中央法規出版株式会社、14-15、2005.